

# 中国人学習者に対する「聞き手ストラテジー」指導の効果

— 授業活動と日本語母語話者の対中国人学習者評価から —

柳田 直美

## 要 旨

学習者、特に日本語母語話者との接触経験の少ない海外の日本語学習者にとって、母語話者が聞き手のときに使用するコミュニケーションストラテジーの習得には難しい点も多い。本稿は、中国人日本語学習者に対して行った会話授業において、会話を円滑に進めるために聞き手が用いるコミュニケーションストラテジーである「聞き手ストラテジー」（柳田 2005）の意識化と実践に関する具体的な授業活動について述べた。さらに、実際に学習者と会話をした母語話者による中国人学習者の聞き手ストラテジー使用に対する評価を分析した結果、授業活動を通して、学習者の聞き手ストラテジーに対する意識が高まったこと、また、母語話者への質問紙調査の結果から、実践①→フィードバック→実践②の過程を経ることによって、学習者の意識が変化しただけでなく、聞き手ストラテジーの使用の増加が母語話者に意識されたことが明らかになった。

【キーワード】 聞き手ストラテジー、授業活動、聞き手ストラテジーの実践、母語話者の対中国人学習者評価

## Influence of Teaching "Listener Strategies" for Chinese Learners of Japanese: activities and Japanese native speakers evaluation of Chinese learners

YANAGIDA Naomi

【Abstract】 There are many difficult points in the acquisition of communication strategy used by listeners, especially for overseas Japanese learners with little contact experience with Japanese native speakers. Therefore the author planned a conversation class for Chinese learners of Japanese where conscious use of the "listener strategy" (柳田 2005) that a listener uses in Japanese conversation and the practice of the "listener strategy" were emphasized. In this paper, I describe the class activities and analyze the evaluation of the listener strategy use by the Chinese learners, as conducted by native speakers who talked with the learners. As a result, the learners' consciousness of the listener strategy improved through the activities. In addition, from a result of the inventory survey to the native speakers it became clear that increase of the use of the listener strategy was felt by native speakers to proceed through a process of practice ①→ feedback → practice ②.

【Keywords】 listener strategy, class room activities, practice of listener strategy, evaluation of Japanese native speakers

## 1. はじめに

日本語の会話において聞き手が使用するコミュニケーションストラテジーには、あいづち、聞き返し、説明要求などがある(尾崎 1993, 堀口 1997 など)。日本語教育においても実践的なコミュニケーション能力育成を目的とした会話教育のためには、このような聞き手の伝達行動についても扱う必要があると言われてきた。

しかし、学習者、特に日本語母語話者(以下、NS)との接触経験の少ない海外の日本語学習者にとって、聞き手が使用するコミュニケーションストラテジーの習得には難しい点も多い。そこで本稿では、2006年に中国吉林大学において、中国人日本語学習者(以下、CL)に対して行った会話授業において、会話を円滑に進めるために、NSの聞き手が用いるコミュニケーションストラテジーである「聞き手ストラテジー」(柳田 2005)の意識化と実践に関する具体的な授業活動について述べ、実際に学習者と会話をしたNSによるCLの聞き手ストラテジー使用に対する評価を分析し、本授業活動の効果を考察したい。

## 2. コミュニケーションストラテジーと聞き手ストラテジー

本稿における「コミュニケーションストラテジー」とは、従来の非母語話者の言語能力の不足による問題解決のための意図的方策(Selinker 1972, Faerch and Kasper 1983 など)という位置づけではなく、話し手だけでなく聞き手を含めた会話参加者が共同で会話を構築していくための方策の一環(藤田 2000)という考えを踏まえ、「談話のやり取りの中で、目的を達成する過程において話し手・聞き手が共同で会話を構築するための手段」(柳田 2004)とする。

次に「聞き手ストラテジー」とは、コミュニケーションストラテジーのうち、会話を円滑に進めるために聞き手が用いる手段である。柳田(2005)は「聞き手ストラテジー」として次の4項目と6つの下位項目(表1)を挙げている。

表1：聞き手ストラテジー (柳田 2005)

- |                         |
|-------------------------|
| 1) 情報要求のストラテジー          |
| a) 情報要求                 |
| 2) 共有表明のストラテジー          |
| a) あいづち      b) 理解表明    |
| 3) 聞き手自身の理解促進のためのストラテジー |
| a) 確認チェック    b) 明確化要求   |
| 4) 話し手に対する発話援助のストラテジー   |
| a) 貢献・完成                |

しかしこれは情報の取り方のみに着目した分類であり、一二三（2002）の示した「発話カテゴリー」のうち、聞き手も使用されると思われる「意見」「評価」が含まれていない。また、「情報要求」についても、話題を転換するための情報要求と、話題を展開するための情報要求の2種類があると考えられる。

よって、本稿では、柳田（2005）の「情報要求のストラテジー」の下位項目に「話題転換の情報要求」と「話題展開の情報要求」を加え、「共有表明のストラテジー」の下位項目に「意見・評価」を加えることとし、表2のように分類した。

表2：聞き手ストラテジー

|                         |                      |                                |
|-------------------------|----------------------|--------------------------------|
| 1) 情報要求のストラテジー          | a) 話題転換の情報要求 (INF-a) | b) 話題展開の情報要求 (INF-b)           |
| 2) 共有表明のストラテジー          | a) あいづち (BC)         | b) 理解表明 (CE)    c) 意見・評価 (O/E) |
| 3) 聞き手自身の理解促進のためのストラテジー | a) 確認チェック (CON.C)    | b) 明確化要求 (CR)                  |
| 4) 話し手に対する発話援助のストラテジー   | a) 貢献・完成 (CON)       |                                |

( ) 内はコーディング記号

各発話機能について、以下に示す。Lは聞き手、Sは話し手を表す。

1) 情報要求のストラテジー

a) 話題転換の情報要求 (INF-a)

会話開始時、または話題を変える際に用いる、直前の会話内容と直接関係のない情報を話し手に要求する発話。

|   |                            |         |
|---|----------------------------|---------|
| L | アキレス腱って切れるときは音が聞こえるらしいですね。 | → INF-a |
| S | パチッてね。私もパチッていましたもん。        |         |

b) 話題展開の情報要求 (INF-b)

直前の会話内容を受けて、さらに詳しい情報や、関連する情報を話し手に要求する発話。

|   |               |  |
|---|---------------|--|
| L | 大変だよ、子育て、ツアー。 |  |
| S | 大変ですね。        |  |

|   |                         |         |
|---|-------------------------|---------|
| L | 大変だよねー。<br>おいくつ、なられました？ | → INF-b |
| S | えっとー、3歳と、               |         |
| L | うん。                     |         |
| S | 7歳です。                   |         |

## 2) 共有表明のストラテジー

## a) あいづち (BC)

話し手に聞いていること、わかったということを伝える、話の進行を助ける発話。本稿ではあいづち詞のみをあいづちとし、堀口 (1997) があいづちとしている相手の発話の繰り返しや言い換えはあいづちに含めない。

|   |   |      |
|---|---|------|
| L | アキレス腱って切れるときは音が聞こえるらしいですね。                  |      |
| S | パチッてね。私もパチッていましたもん。                         |      |
| L | 切れました？                                      |      |
| S | 伸びた瞬間の音でしたね。                                |      |
| L | へえー。  | → BC |
| S | で、きれいにやっぱ0.00何秒で、きれいにたおれなきゃいけないって意識が働くんですね。 |      |
| L | ほおー。  | → BC |
| S | パタッてからスーって倒れたら、幕が何秒たっても下がらない、ふりだと思って。       |      |
| L | はあー。  | → BC |

## b) 理解表明 (CE)

あいづち詞以外の言語形式を伴って、相手の発話を理解したことを積極的に表す発話。

|   |         |      |
|---|---------|------|
| S | 全部で77勝。 |      |
| L | なるほどー。  | → CE |

## c) 意見・評価 (O/E)

話し手の発話に対して、聞き手が自分の意見や評価を述べる発話。

|   |                    |       |
|---|--------------------|-------|
| L | もう小学生、小学生のママ。      |       |
| S | はい。もうなんか、少女になってきて。 |       |
| L | あらあー、かわいいママ。       | → O/E |

### 3) 聞き手自身の理解促進のためのストラテジー

#### a) 確認チェック (CON.C)

話し手の発話を聞き手が正しく理解しているかどうか、聞き手自身が話し手に確認する発話。話し手の発話があいまいであったものを聞き手自身が言ったり、質問形式で確認したり、聞き手が話し手の発話の全部、または一部を繰り返したりして、話し手の発話に対する自身の理解を確認する。

|   |                                       |         |
|---|---------------------------------------|---------|
| S | パタッてからスーって倒れたら、幕が何秒たっても下がらない、ふりだと思って。 |         |
| L | はあー。<br>あ、舞台上で切れたの？                   | → CON.C |
| S | そうですよ。                                |         |
| L | アキレス腱？                                | → CON.C |
| S | そうですよー。                               |         |

#### b) 明確化要求 (CR)

聞き手が話しての発話を理解できないときやよく聞こえないときに、相手に発話を明確にするように要求する発話。確認チェックと異なる点は、聞き手側には自分なりの理解がないままに話し手の発話を要求するという点である。

|   |                            |      |
|---|----------------------------|------|
| S | それで、イベントが盛り下がったことがあったんですよ。 |      |
| L | え？                         | → CR |

### 4) 話し手に対する発話援助のストラテジー

#### a) 貢献・完成 (CON)

話し手が適当な語彙や表現を探せないでいるときに、聞き手がその言葉を予想して、相手の発話を引き取って、代わりに発話して完成させる発話。

|   |                |       |
|---|----------------|-------|
| S | おばちゃんに嫌われたら・・・ |       |
| L | 仕事できない。        | → CON |
| S | 仕事できない。        |       |

### 3. CLの聞き手ストラテジーに対する意識と実態

CLに対する聞き手ストラテジーの授業活動を試みるにあたって、CLが日本語会話における聞き手ストラテジーについてどのような意識を持っているか、また、その使用実態について考えたい。

### 3.1 中国在住のCLのあいづちに対する意識

楊(2002)はあいづちに関する意識について、NSとCL(中国在住の日本語専攻のグループと日本留学2年以上のグループ)の三者にあいづちに関する質問紙調査を実施し、比較した。

このうち、中国在住の日本語専攻のCLとNSとの比較を見ると、CLは普段、NSと接触することも少なく、NS同士の会話の場面を観察する機会も少ないため、あいづちに対する意識が高く、あいづち行動のパターンを積極的に受け入れようとする姿勢が見られると述べられている。しかしその反面、母語(中国語)における聞き手の言語行動の影響が強く、CLの中には、NSとは異なるあいづち行動(「微笑みながら聞く」)や、あいづちの機能(「自分に話させてもらいたい時にあいづちをうつ」)、さらにあいづちのタイミング(「自分の知りたい情報があった時にあいづちをうつ」)を適切ととらえている学習者が多いことが明らかにされた。

このことから、NSとの接触経験の少ないCLに対する聞き手ストラテジーの授業活動の際には、まず、日本語のあいづちとは何かを中国語との比較を通して意識させる必要があると考えられる。また、このことはあいづちにとどまらず、他の聞き手ストラテジーについても同様の必要性があるといえるだろう。

### 3.2 CLの聞き手ストラテジーの使用実態

聞き手ストラテジーのうち、あいづちについては、日本語以外の言語との対照や日本語学習者とNSのあいづちとの比較など、さまざまな観点から研究が行われてきた。それらの研究の結果、日本語学習者のあいづちの頻度がNSよりも少ないこと、タイミングや形態、機能がNSのものとは異なる部分があることが明らかになっている(渡辺1994, 堀口1997, 楊2001など)。

また、2004年に筆者が行なった本授業活動と同様の活動からも、あいづち、確認チェック、明確化要求、意見・評価、貢献・完成の使用頻度が少なく、情報要求については話題転換の情報要求は多く使用されるものの、話題展開の情報要求の使用頻度が少ない実態が明らかになった。

以上のことから、CLの聞き手ストラテジーの使用実態についても、NSと異なっていることがわかった。よって、その指導にあたっては、まず、CLにさまざまな聞き手ストラテジーに対する意識を喚起し、その上で実際に使用する練習が不可欠であるといえるだろう。

## 4. 授業活動内容

### 4.1 授業活動で扱う聞き手ストラテジー

聞き手ストラテジーを授業活動で取り上げるにあたり、表2の聞き手ストラテジー項目から、2004年に筆者が行なった本授業活動と同様の活動の際、特に、指導の必要があると思われた以下の項目（表3）を選び、扱うこととした。

表3：授業活動で扱う聞き手ストラテジー

| ストラテジー     | 発話機能                    |
|------------|-------------------------|
| 情報要求       | 話題展開の情報要求 (INF-b)       |
| 共有表明       | あいづち (BC) / 意見・評価 (O/E) |
| 聞き手自身の理解促進 | 確認チェック (CON.C)          |

### 4.2 クラスの概要

今回の授業活動の対象者は中国・吉林大学日本語専攻の3年生である。学習者は中国語母語話者36名、朝鮮語母語話者1名の計37名である。日本語のレベルは、概ね日本語能力試験1級に相当する。

授業は週2回（各90分）で、そのうち週1回45分を聞き手ストラテジーの活動に充て、聞き手ストラテジーの導入・実践・フィードバックを3回にわたって実施した。

### 4.3 授業活動の内容

授業活動は、導入①、導入②、導入③、実践①、フィードバック①、実践②、フィードバック②である。以下に、授業ごとの活動内容について述べる。

#### 4.3.1 第1回（導入①、導入②、実践①）

##### 導入① NSとCLの【会話A】とNS同士の【会話B-1】の比較

まず、聞き手ストラテジー意識化の第一段階として、学習者にNSとCLのインタビュー会話【会話A】<sup>1</sup>と、NS同士のインタビュー会話【会話B-1】（後掲）<sup>2</sup>を聞かせ、2つの会話で異なる点をクラスで話し合った。二つの会話を比較するねらいは、日本語学習者とNSが使用する聞き手ストラテジーの違いを直感的に意識させることである。そのため、学習者に対して、この時点での会話スクリプトの提示は行なわなかった。

話し合いの結果、学習者から以下のような点が指摘された。

- ・【会話A】より【会話B-1】の方が、会話が盛り上がっている。
- ・CLはあいづちが少ない。
- ・【会話B-1】のNSはあいづちが多い。

- ・【会話 B-1】の NS の話し方は、日本語では自然だが、中国語で同じように話したら、話を聞いていないようで、失礼な感じがする。

このことから、学習者は2つの会話を比較することによって、CL と NS のあいづちの頻度の違いや中国語のあいづちと日本語のあいづちの違いに気づいたといえる。しかし、あいづちの頻度以外の聞き手ストラテジーにまでは意識が向かなかったようであった。そのため、次の導入②と導入③では、NS 同士の会話から、あいづちも含めたさまざまな聞き手ストラテジーを取り上げた。

### 導入② NS の聞き手ストラテジーの聞き取り

導入①後、あいづちの頻度、あいづちの種類、確認チェックの三点の意識化を図るため、【会話 B-1】のスク립トを配布し、下線部①～⑥の穴埋め形式の聞き取りと、各発話の聞き手ストラテジーの機能の提示を行なった。

【会話 B-1】 話題：アキレス腱を切ってギブスをした時の話

H：男性司会者 G1：ゲスト（女性）

|    |   |                 |
|----|---|-----------------|
| H  | アキレス腱って切れるときは音が聞こえるらしいですね。                      | → INF-a         |
| G1 | パチッてね。私もパチッていましたもん。                             |                 |
| H  | 切れました？  | → CON.C         |
| G1 | 伸びた瞬間の音でしたね。                                    |                 |
| H  | へえー。  | → BC            |
| G1 | で、きれいにやっぱ 0.00 何秒で、きれいにたおれなきゃいけないっていう意識が働くんですね。 |                 |
| H  | ①ほおー。   | → BC            |
| G1 | パタッてからスーって倒れたら、幕が何秒たっても下がらない、ふりだと思って。           |                 |
| H  | ②はあー。<br>あ、舞台上で切れたの？                            | → BC<br>→ CON.C |
| G1 | そうですよ。  |                 |
| H  | アキレス腱？  | → CON.C         |
| G1 | そうですよー。   |                 |
| H  | 痛いらしいですね。                                       | → O/E           |
| G1 | いやあもうひどかったです。1ヶ月入院しました。ギブス巻いて。                  |                 |
| H  | ③あ、そう。<br>1ヶ月やってると筋肉が半分くらいになるでしょ？               | → BC<br>→ INF-b |

|    |                                      |         |
|----|--------------------------------------|---------|
| G1 | あ、もうまったくなくなります。はい。                   |         |
| H  | そうなんですよ。                             | → O/E   |
| G1 | で、毛がもわって生えるの。知ってる？                   |         |
| H  | え、④毛が生えるんですか？                        | → CON.C |
| G1 | 毛が生えるの。                              |         |
| H  | ギブスやると？                              | → CON.C |
| G1 | ギブスの中でもやしみたいない白い毛がうわって。もう。ほいで、       |         |
| H  | あ、そう。                                | → BC    |
| G1 | もやしみたいになるじゃない？で、ふーっと軽くなるじゃないですか、取って。 |         |
| H  | ⑤はい、はい。                              | → BC    |
| G1 | ほいで、日光にあるとその毛が真っ黒になるのよ。              |         |
| H  | へえー。                                 | → BC    |
| G1 | 熊みたいになっちゃうの、足だけ。                     |         |
| H  | へえー、おもしろい。                           | → BC    |
| G1 | 驚きましたね、私も。                           |         |
| H  | ⑥日光に当たらないと、白い毛なんだ。                   | → CON.C |
| G1 | そうです。もやしちゃんみたいに。ほわーんと。               |         |
| H  | へえー。                                 | → BC    |
| G1 | それが日光に当たった瞬間、真っ黒バリバリ。こわいよ。           |         |
| H  | へえー。                                 | → BC    |

この活動を通して、学習者は、NSのあいづちの種類が多さ、頻度に驚いたようであった。ふだん、学習者はどうしても同じあいづちばかりを使いがちであるが、生の会話データを視聴することによって、NSのあいづちの使用実態を知ることができたのではないだろうか。

また、確認チェックに関しては聞き取りを通して初めて意識したようであった。そこで、確認チェックは非母語話者が母語話者から「理解可能なインプット」を引き出すために用いる意味交渉の方法である(Scarcella and Higa, 1981)ことから、「会話参加者同士の理解を促進したり誤解を避ける機能があり、学習者にとっては有効なコミュニケーションの手段」(柳田 2005)であることを伝え、NSとの会話の中で積極的に使用するよう、促した。

### 導入③ NS 同士の【会話 B-1】と NS 同士の【会話 B-2】の比較

次に、話題展開の情報要求と、意見・評価の意識化を図るために、NS 同士のインタビュー会話【会話 B-2】<sup>3</sup>を聞かせ、NS 同士のインタビュー会話【会話 B-1】と比較し、異なる

点をクラスで話し合った。その際、【会話 B-1】と同様、【会話 B-2】の SCRIPT を配布し、下線部①～⑦の穴埋め形式の聞き取り、各発話の聞き手ストラテジーの機能の提示を行なった。

【会話 B-2】 話題：小学生の娘と PTA 参加の話

H：男性司会者 G2：ゲスト（女性）

|    |                                   |         |
|----|-----------------------------------|---------|
| H  | 大変だよ、子育て、ツアー。                     | → O/E   |
| G2 | 大変ですね。                            |         |
| H  | 大変だよねー。                           | → O/E   |
|    | ① <u>おいくつ</u> 、なられました？            | → INF-b |
| G2 | えっとー、3歳と、                         |         |
| H  | うん。                               | → BC    |
| G2 | 7歳です。                             |         |
| H  | え、もう一番上、7歳になるの？                   | → INF-b |
| G2 | はい。もうなんか、少女になってきて。                |         |
| H  | へえー。                              | → BC    |
| G2 | 学校行ってんですけどね、今。                    |         |
| H  | へえー。                              | → BC    |
|    | もう小学生、小学生のママ。                     | → CON.C |
| G2 | はい。もうなんか、少女になってきて。                |         |
| H  | あらあー、② <u>かわいいママ</u> 。            | → O/E   |
| G2 | いやいやいや。でも、PTA のファッション、ちょっと違うんですよ。 |         |
| H  | PTA 出るわけでしょ？                      | → INF-b |
| G2 | 出れる時はなるべく参加。                      |         |
| H  | ③ <u>ほおー</u> 。                    | → BC    |
|    | これでやっぱ、行くわけ？                      | → INF-b |
| G2 | いや、ちょっと露出が多いですよ、これだと。             |         |
| H  | あ、まあ、業界では普通だけどね。                  | → O/E   |
| G2 | はい。                               |         |
| H  | PTA としてはちょっと露出が多いよね。              | → O/E   |
| G2 | なるべく、                             |         |
| H  | うん。                               | → BC    |
| G2 | 普通にとと思うんだけど、なかなか普通の服がないっていうか。     |         |
| H  | ④ <u>はあ、はあ、はあ</u> 。               | → BC    |
| G2 | 困りますねえ。                           |         |
| H  | ⑤ <u>ど、どうしてる？</u>                 | → INF-b |

|    |                    |         |
|----|--------------------|---------|
| G2 | うん、ちょっと、地味目な色とか。   |         |
| H  | ⑥ああそう。             | → BC    |
| G2 | うん。                |         |
| H  | PTA 出てんだよね。        | → CON.C |
|    | ⑦変われば変わるもんだよ。      | → O/E   |
| G2 | でも、普通ですよ。うん、普通。うん。 |         |

その結果、学習者から以下のような点が指摘された。

- ・【会話 B-2】のゲストは【会話 B-1】のゲストより口数が少ない。
- ・【会話 B-2】の方が、【会話 B-1】より話題展開の情報要求が多い。
- ・【会話 B-2】は、意見・評価が多い。

学習者が指摘したように、【会話 B-1】のゲストが自ら積極的に話すタイプだったのに対し、【会話 B-2】のゲストはおとなしく、積極的に話すタイプではなかった。だからこそ、男性司会者は話題展開の情報要求を多く行っていたのである。また、聞き手は、情報要求によって得られた話し手からの情報に対して、何かしらの意見や評価を述べる必要がある。よって、男性司会者の発話には意見・評価が多く見られる。

この活動を通して、学習者の注意が話題展開の情報要求と意見・評価に向けたため、実際に使用するよう促した。

導入①～③では、実践への準備として、CLとNSの【会話 A】とNS同士の【会話 B-1】、【会話 B-2】の視聴から、あいつち（頻度・種類）、確認チェック、話題展開の情報要求、意見・評価の意識化を図った。学習者の反応から、導入①～③によって、聞き手ストラテジーに対する意識が高まったことがうかがえよう。

#### 実践①課題：NS へのインタビュー

導入①、②の後、聞き手ストラテジーの実践の1回目として、「あるトピック<sup>4</sup>について日本人にインタビューする」という課題を与えた。その際、(1) 聞き手ストラテジーを使ってインタビューすること、(2) インタビューを録音すること、(3) インタビューをしたNSに質問紙調査に協力してもらうこと、の三点を指示し、翌週に提出させた。

#### 4.3.2 第2回（フィードバック①、実践②）

##### フィードバック①

実践①のフィードバックとして、何組かの会話をクラス全体で聞き、気づいた点となぜそのようにしたのかという理由をクラスで話し合った。その結果、各聞き手ストラテジーについて、学生から以下のような意見が出た。

**【話題展開の情報要求】**

- ・話題展開の情報要求より、「他にありますか」などの話題転換の情報要求の方が多い。
- ・(理由) 用意した質問をするだけで、会話を展開させることができなかつたのではないか。
- ・(理由) 用意した質問をすることばかり考えて、相手の話を十分に聞いていなかったのではないか。

**【あいづち】**

- ・(うなずきはあるかもしれないが) あいづちが聞こえない。
- ・種類が少なく、同じあいづちばかり使っている。
- ・(理由) あいづちの種類がたくさんあることは知っているが、いろいろなあいづちを使うのは難しいと思う。

**【意見・評価】**

- ・「そうですか」を意見・評価の代わりに使っている。
- ・具体的な意見や評価がない。
- ・(理由) 意見や評価を言おうと思っても、自分が言いたいことをまとめるのに時間がかかるからではないか。

**【確認チェック】**

- ・非常に少ない。
- ・(理由) あいづちで代用しているのではないか。
- ・(理由) 確認チェックをしようと思っても、自分が言いたいことをまとめるのに時間がかかるからではないか。

このことから、学習者は導入①～③で、聞き手ストラテジーに対する意識は高まったものの、それらのストラテジーを使える段階には達していなかったということがわかる。

これらの意見をもとに、教師側から以下のような改善方法を提示した。

**【話題展開の情報要求】**

話し手の話をよく聞き、その内容に関係する質問をする。

**【あいづち】**

うなずきと同時に、あいづちを音声で表す。

急にいろいろなあいづちを使うのは難しいかもしれないが、できるだけたくさんのあいづちを使ってみる。

**【意見・評価】**

話し手の話をよく聞き、一言でもよいので、具体的な意見や評価を述べる。

### 【確認チェック】

確認チェックの機能（会話参加者同士の理解を促進したり誤解を避ける機能）を意識し、話し手の発話を繰り返すなどの確認チェックを行なう。

### 実践②課題：NS へのインタビュー

フィードバック①の後、聞き手ストラテジーの実践の2回目として、「あるトピックについて日本人にインタビューする」という課題を与えた。その際、(1) フィードバックを参考に、聞き手ストラテジーを使ってインタビューすること、(2) インタビューを録音すること、(3) インタビューの相手が実践①と同じ場合、1回目とは異なるトピックで話すことの三点を指示し、翌週に提出させた。

### 4.3.3 第3回（フィードバック②）

#### フィードバック②

実践②のフィードバックとして、教師側から全体へのフィードバックを行なった。学習者には全体的に、実践①→フィードバック①を経て、実践②では、話題展開の情報要求、あいづち、意見・評価、確認チェックが多くなり、話し手の話を聞く姿勢が見られるようになった。そのため、今後も日本語の聞き手ストラテジーを意識してNSとの会話に臨むよう、指導した。

## 5. NS の対学習者評価

前節まで、CL に対して行なった聞き手ストラテジーの授業活動について述べてきた。では、実践①と実践②において、実際にCLのインタビューを受けたNSは、CLの聞き手ストラテジーの使用をどのように感じていたのだろうか。

そこで、ここでは実践①と実践②で同じ学習者のインタビューを受けたNS29名に対して行なった質問紙調査の結果を述べ、分析を行ないたい。

### 5.1 質問紙調査の概要

質問紙調査は、それぞれ実践①、②の後に行なわれた。そのうち、実践①と実践②において、学習者の聞き手ストラテジーの変化についての質問に回答した28名の、話題展開の情報要求、あいづち、意見・評価、確認チェックに関する質問の結果を次で述べ、分析する。

### 5.2 質問紙調査の結果と分析

質問は、「前回（実践①）と比べて学生の話し方はいかがでしたか」で、話題展開の情

報要求、あいづち、意見・評価、確認チェックに関する項目を3（前回より上）、2（前回と同じ）、1（前回より下）の3段階で評価してもらった。その結果を表4に示す。

表4：質問紙調査の結果

| 項目        | 質問                    | 上          | 同じ         | 下        |
|-----------|-----------------------|------------|------------|----------|
| 話題展開の情報要求 | たくさん質問した              | 60.7% (17) | 39.3% (11) | 0% (0)   |
| あいづち      | あいづちが多かった             | 67.9% (19) | 25.0% (7)  | 7.1% (2) |
| 意見・評価     | 自分の意見をたくさん話した         | 60.7% (17) | 39.3% (11) | 0% (0)   |
| 確認チェック    | あなたの言葉を繰り返したり、まとめたりした | 75.0% (21) | 21.4% (6)  | 0% (0)   |

( ) 内は人数

表4の結果を見ると、話題展開の情報要求、あいづち、意見・評価、確認チェックのすべての項目において、実践①よりも実践②の方が「上」と答えたNSの割合が60%を超えている。

このことから、実践①→フィードバック①→実践②を経ることで、学習者の聞き手ストラテジーに対する意識が高まり、NSが感じるほどの変化が現れたと考えられる。

また、その中でも、確認チェックの「前回より上」の割合が75%を超えていることから、導入で扱ったものの、実践①であまり使用されなかった確認チェックが、フィードバック①を実施したことによって、NSが感じるほどの変化を見せたといえよう。確認チェックは、「会話参加者同士の理解を促進したり誤解を避ける機能があり、学習者にとっては有効なコミュニケーションの手段である」（柳田 2005）ことから、フィードバックではこの機能に触れ、積極的に使用するよう促したが、その効果が表れたと考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

以上、2006年に中国吉林大学において、CLに対して行った会話授業において、聞き手が用いる「聞き手ストラテジー」（柳田 2005）の意識化と実践に関する具体的な授業活動について述べ、NSの中国人の聞き手ストラテジー使用に対する評価を分析し、本授業活動の効果を考察してきた。

その結果、授業活動を通して、学習者の聞き手ストラテジーに対する意識が高まったこと、また、NSへの質問紙調査の結果から、実践①→フィードバック①→実践②の過程を減ることによって、学習者の意識が変化しただけでなく、聞き手ストラテジーの使用の増加がNSに感じられたことが明らかになった。

このことから、本授業活動は、CLの聞き手ストラテジーの意識化と実際の使用に一定の効果があつたといえるのではないだろうか。

しかし本稿では、実践①と実践②の会話において、実際に聞き手ストラテジーの使用数が伸びたかについては、明らかにすることができなかった。よって、各聞き手ストラテジーの使用数の変化、質的变化、また、NSの質問紙調査の結果と聞き手ストラテジーの使用実態との関係を明らかにすることを今後の課題としたい。

## 注

1. 2004年に筆者が行なった本授業活動と同様の活動で、CLとNSとの会話を録音したものの。
2. テレビ番組「笑っていいとも」の一部。男性司会者がゲストとインタビュー形式で対談する。生放送であることと、あらかじめせりふが決まっているわけではないため、男性司会者の自然な聞き手ストラテジーを観察することができると考え、使用した。【会話 B-1】のゲストは女性。
3. 【会話 B-1】同様、テレビ番組「笑っていいとも」の一部。ゲストは【会話 B-1】とは異なる。【会話 B-2】のゲストは女性。
4. トピックは「箸の使い方に関するタブー」「結婚式のタブー」「お葬式のタブー」「病院にお見舞いに行くときのタブー」の四つである。

## 参考文献

- 尾崎明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー－『聞き返し』の発話交換をめぐって」『日本語教育』81号：19-30
- 一二三朋子 (2002) 『接触場面における共生的学習の可能性－意識面と発話内容面からの考察－』風間書房
- 藤井聖子 (2000) 「在日日系ブラジル人と日本人との接触場面の一分析－コミュニケーションストラテジー再考－」『日本語と外国語の対照研究Ⅶ日本語とポルトガル語 (2)：ブラジル人と日本人との接触場面』国立国語研究所：151-192
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 柳田直美 (2004) 『日本語非母語話者との接触場面において母語話者の情報やりとりストラテジーに接触経験が及ぼす影響』筑波大学地域研究研究科修士論文
- 柳田直美 (2005) 「聞き手ストラテジーの意識化を目指した会話授業－実践的なコミュニケーションのために－」『戦後日本60年国際学術研討会論文集日本学論壇』日本学論壇編集部：219-224
- 楊昌 (2001) 「電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちについて－機能に着目した日本人との比較」『日本語教育』111号：46-55
- 楊昌 (2002) 「日本語の相づちに関する意識における中国人学習者と日本人との比較」『日

本語教育』114号：90-99

渡辺恵美子 (1994) 「日本語学習者のあいづちの分析－電話での会話において使用された言語的あいづち」『日本語教育』82号：110-122

Faerch, C. and Kasper, G (1983) "Plans and strategies in foreign language communication".  
in C. Faerch & G. Kasper (ed.) *Strategies in Interlanguage Communication*. 20-44

Scarcella, R. and Higa, C. (1981) "Input, Negotiation, and Age Differences in Second Language Acquisition". *Language Learning*31:2. : 409-437

Selinker, L. (1972) "Interlanguage", *International Review of Applied Linguistics*, Vol.10, No.3. 209-231